

けいせいぎんたん き 『傾城禁短気』

文化学園大学教授(文学・日本文化論担当) 近藤 尚子

大津街道に六兵衛という駕籠舁(駕籠の担ぎ手)がいた。相肩は同年代の七兵衛という男である。この二人が霜月(旧暦の11月)8日の嵐の夜、一人の男に「空駕籠ならば八丁(筆者補:大津の宿屋町の名)まで頼むぞ」と声をかけられた。ところがこの男、駕籠に乗る間もなく死んでしまう。その最期に言い残したのは、自分の肌着に小判千両と書付を縫いつけてある、それを二人にやるので柴屋町の歌仙という遊女を三百両で身請けし、残りは二人で使ってよい、ということであった。それをきっかけとして、七兵衛がかつて「関の万作」というお大尽であったこと、六兵衛も「米屋町の俵六」というお大尽であったこと、どちらもこの歌仙となじみであったこと、さらに二人とも「都立売の三大長者、子林静閑」の子であるということがわかる。異母兄弟が落ちぶれて偶然にも駕籠舁の相肩となっていたのである。そして死んだ男の懐の書付を読むと、この男は静閑の本妻腹の子で乙次郎といい、歌仙は静閑が召使の女に生ませた娘おかんであると判明する。妾腹であっても妹を遊女としておくに忍びなく、乙次郎が本家の金を盗み出して身請けをしようとしたのである。こうして4人ともに異母兄弟であることが明らかとなり、残された3人は出家して乙次郎を弔うのであった……。『傾城禁短気』第4巻第4話「教の駕籠に法の道連」という話である。幕末の黙阿弥を思い起こさせる波乱万丈の展開ではないだろうか。

『傾城禁短気』は宝永8(1711)年4月「作者八文字自笑」の序を付して刊行された。実はその3年も前から、八文字屋(江戸時代の京都の出版元)刊行の書籍にはたびたび『傾城禁短気』の広

告が載せられていたがなかなか実現せず、宝永8年に至ってようやく刊行されたのである。遅延の理由は実作者・江島其磧と八文字自笑との確執にあったといわれている。本書の出版後、其磧は八文字自笑の下での執筆をやめ、一子市郎左衛門に書肆(書店)の江島屋を開業させている。

浮世草子は天和3(1683)年井原西鶴の『好色一代男』に始まり、ほぼ100年間にわたって出版された。最初の約20年は創始者である西鶴とその模倣の時代であるが、残りの80年は八文字屋本の時代とされている。この時期の八文字屋の消長は浮世草子の展開と深くかかわっている。二代目(あるいは三代目とも)八文字屋自笑は江島其磧を作者に迎えて役者評判記を、次いで浮世草子を出版し、人気を博した。元禄14(1701)年『傾城色三味線』が其磧の最初の浮世草子である。挿絵師には西川祐信(すけのぶ)を起用し、横本の体裁にするなど新工夫を施した。

実作者の江島其磧は本名を村瀬権之丞という。寛文6(1666)年、京都の大仏餅屋に生まれた。縁者には大商人が多く、其磧自身も相当富裕な町人であったと思われる。匿名で浄瑠璃などを書いてきたことから、自笑の代作者として執筆するようになったらしい。そして役者評判記でも浮世草子でも大当たりを取り、出版元である八文字屋は鶴屋・山本屋という老舗の正本屋を凌ぐようになる。しかし其磧の不満は次第に募り、先述のように『傾城禁短気』を最後に自笑と袂を分かつことになる。その後両者はそれぞれの出版物で相手を非難し続け、その応酬は享保3(1718)年までの7年に及んだ。

『傾城禁短気』はその其磧の代表作とされている。6巻6冊で各巻4話ずつ、計24話からなる。近世初期に起こった日蓮宗対天台宗の宗論を禁断義あるいは禁談義と呼ぶ。書名の「禁短気」はそのもじりである。また当時は三味線にのせ節をつけて庶民に教えを説くことが、幕府の禁令にもかかわらず流行していた。これも談義と呼ばれている。天正7(1579)年には法華宗対浄土宗の100年に及ぶ宗論の発端となった安土宗論が起こっている。こういった出来事や流行をふまえ、角書に「色道大全」とあるように「色道」の諸相を描いている。

第1巻では^{がんしき こじ}蕪色居士が女道門を広めるためにさまざまな色談を語る。第2巻では蕪色居士とてれん上人らが姪乱居士を判者として男色女色の色論を展開する。この巻は第1話に「野傾の両宗あづち論」とあるように、安土宗論をやつしている。第3巻では「白人」と呼ばれる私娼の風俗が描かれる。第4巻は江戸・吉原寺において四十八夜の夜見世の説法という趣向で、女郎の短気を戒める。これが書名の「禁短気」の由来である。この第4巻の第4話が最初に触れた「教の駕籠に法の道連」である。第5巻では難波西横堀新町の新艘女郎に姉女郎が遊女として心得ておくべきいろいろ

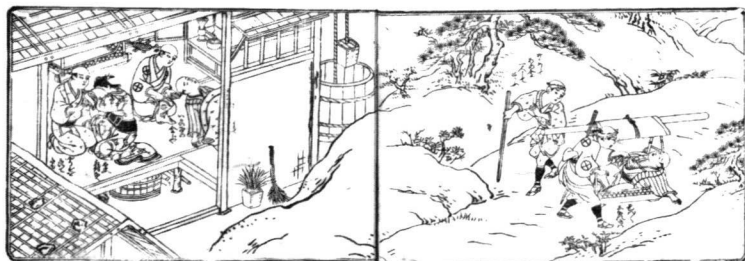
な法を説く。第6巻では色里一遍上人が京島原に近い水薬師で色道五重相伝を行う。このように全巻が宗論や談義のパロディなのであるが、本文も他の其磧の作品同様、西鶴の剽窃に満ちている。「教の駕籠に法の道連」も実は西鶴の『好色盛衰記』の「仕合よし六蔵大臣」をもとにしている。しかし『好色盛衰記』では六蔵という馬方が客の男から千両の金を託されるところは同様であるにしても、その最期の頼みは「柴屋町の女郎狂いして我跡をとひ給はれ」ということであり、六蔵はその遺言どおり、千両の金で大臣(大尽)となる。本文は「今いふもふるけれども極まる所は金の世の中」と結ばれる。きわめて西鶴らしいが、一方の其磧はここに複雑な人間関係を設定して趣向を凝らし、ドラマティックな展開に仕立てている。

本館所蔵の『傾城禁短気』は奥付を欠くが、第6巻題簽小外題に「分里」の二字があり、早い版であると考えられる。最後に第5巻第1話、「難波の新艘水上の新談義」の挿絵を掲げておく。西川祐信の筆になる。衣桁に12の小袖を掛け、11人の女郎が衣裳を競いながら姉女郎の説法を聴聞するという場面である。

*引用は『浮世草子集(日本古典文学大系91)』による



「難波の新艘水上の新談義」
『傾城禁短気 第5巻第1話』より



「教の駕籠に法の道連」
『傾城禁短気 第4巻第4話』より